



小説 縁談

永代美知代

「どだいもう、血迷ひ切つとる！」

吐き出すやうな調子で云ひ捨てると一緒に、康之進は机の上に手紙を投げ出した。

「難題のつもりぢやろう、和兄さんが起きたらさう云へ、別に返事を出す必要もない云ふとつたつての、ぢや私、代々木へ出掛けて行かう」

斯う娘の小枝子に云ひつけて、康之進は代々木の普請場へ出掛けて行つた。其處には、東京で役について居る伴の和彦が邸宅を新築中なのである。康之進は性

婦人評

縁

來の普請道樂で、田舎に居ても年中貧乏の中、何處かを修繕したり、建てたりばかりしたがつて居る。今度もわざ／＼、忙がしい自家の用事を差繰り、二百里近い田舎から出向いて彼是もう、一月の餘も逗留して居るのである。

後で小枝子は不思議に思つた。

長谷部民太郎——手紙の裏を翻すと差出人の姓名は斯う記された。

「長谷部民太郎……」

小枝子はハツとして思ひ當つた。殆んど何を考へる暇も無く、突然手紙の中を開いた。

前署御免下され度、取り急ぎ得貴意申候。さて先日來、小生俸博義對、攝州後藤家御令嬢美彌子様の縁組につき、屢々仲人卷田氏を相煩はし居候處、今般

後藤家より返書これあり、後藤家にては伴の人物など御讀め下され、都合にて縁組致してもよろしと云の文面に御座候も、何分にも御貴殿山川家の承諾されなくてはとの事に有之候。御貴殿へ御承諾下さ

談



「それはい、すべて目出度相續り可申、然して山川家と小生宅とは素々縁家先に有之候事故、何卒この縁組よしなに御盡力下し置かれ候やう、伏して嘆願申上げ候早々、敬具。」

「まあ甚しい！」

讀み了つて、小枝子の胸は踊つた。

「あんな家へ？早速長谷部の身元を委しう書いて、斷然断るやうに、後藤へさう云つてやらんにや！」

父の康之進が斯う眼の色を變へて憤慨したのは、つい七八日前の事であつた。小枝子はそれつまり、美彌子のこの口の縁談は立ち消えになつたものだとかかり思つてゐた。

美彌子と云ふのは、小枝子の嫂の姪に當つて、後藤家の長女に産れた。縣下でも五番と下らぬ多額納税者で、非常に門地の高い名望家な、貴族院議員の父親を持つた上に、容色も人並以上に美しく、今年の春優等の成績で女學校を卒へた美彌子は、降る程澤山な縁談をかけられた。そしてその中の一人に長谷部博義と

いふのがあつたのである。博義は、私立大學の秀才で、今も猶東京に遊學中の身の上だが、それを美彌子の父の後藤氏へ申入れたのは、巻田氏と云ふ同じ貴族院議員の一人で、博義の父に當つた長谷部民太郎と一緒に、やはり小枝子の父と同じ縣下の多額納税者なのであつた。そして山川家と長谷部の家は、僅か八里ならずしか離れては居ないのである。

「長谷部家は如何なる家柄に有之候にや、御同縣御同國の事とて、乍恐縮貴家にて御取調願はれ候はゞ、幸と存候。但し内々に探り候處によれば、本人博義氏は非常なる秀才にて、殆ど某大學開校以來の人物に有之候よし、卒業後は東京に住居致さずてもよろしきやうの話につき、或ひは良縁にもやと存ぜられ申候。」

最初後藤からの手紙は斯う云ふ風に認められた。「本人がそんなに出來の好い方て御座いますとねえ」

嫂はたゞ姪の爲まかれとばかり、傍から口を出した。

和彦は勿論、つい去年まで郷里の方に育つて、いゝん事柄や世間の噂を聞き知つて居る小枝子は黙つて、不機嫌な父の前に坐つて居た。

「いや、何ほ本人の出來がようでもないけせん」

康之進は苦い顔をして首を振つた。

「東京ならがまはないだらうがね、まだ地方ぢや中々さう云ふわけに行かんからねえ」

學者で比較的新らしい筈の和彦までが、一向氣乗りのしない事を云ふ。

「何か血統でも？」

「さうまだ僅か三代ぢやから何ぢやが、そんな事は今日まで現れとらん」

「三代？」

「さうぢや、本人で三代目に當るんぢや」

康之進の言葉は重かつた。

「和彦、まだ伊井の家なんぢや、古い手簾笥の引出でも開けたら、いろんな書きつけ位出て來るぢやらうよ」

眼をつぶつた康之進は、金五十文也、佐市に違はすと云つた書類を見るやうな心地がした。そしてつい四十年前まで馬を曳いて、其處いらを使ひ歩きした佐市の姿が、あり／＼眼の先をちらつくやうにも思つた。佐市——民太郎——そして長谷部博義——

「さうですか、幾ら多額納税者で、金がありまじたつて、實家なんかへよくも憶面なしに縁談をかけたことねえ」

嫂は口惜しげに云つた。

後藤家はずつと昔千年も前に、京都××院の開祖××上人を出したやうな格式の家だと云ふので、彼女は始終それを誇にして居る位であつた。

「金力萬能の世の中だからねえ」

和彦は笑ひながら云つた。

「それが憎い！」

康之進は如何にも憤慨したらしく云ひ切つた。小枝子はたゞ呆れたやうに父の容子を見守つた。

「一體成り上り者の癖で、金さへあり、どんな事で



も出来るものだと思ひ込んで、それに又金で家柄を賣る者があるからいかん」

和産にも小枝子にも覺えがある。それはもう、十年もその上も昔の事で、まだ小枝子がやつと尋常小學校の一年級位な時分であつた。その頃新らしく赴任して来た校長に長原と云ふ先生があつた。人品の好い、すらりとした方とだけしか記憶に残つて居ないけれど、小枝子は初めて會つたこの先生から、

「やうやう、あなたは山川さんですね」と、莞爾笑ひかへて頭を撫でられたのを、よく覚えて居る。そして先生が家へ挨拶に見えた時、何だかしら頻りに手をついて父に頼んで居た。小枝子は子供心に先生が叱られて居るのではあるまいかと氣を揉んだりしたものだ。

「小枝子さん、あなたの家と今度の校長先生は御親類ね」

斯う友達から云はれる度に、小枝子は赤くなつて、其處を逃げ出した。

長原校長と云ふのは、小枝子の町からやはり、七八

里離れた村の舊家の息子で、小枝子の父の曾祖母に於ける人が、昔その長原家から嫁いで来た。全く長原校長と小枝子の家は親類なのに相違ない。だが小枝子兄妹は新校長がその町へ赴任して来るまで、ついそ一度さうした親類の名前さへ聞かされなかつた。それには色々事情のある事で、一口に云へば、校長の祖父にあたる人が門閥家柄を賣り物に、長谷部民太郎に娘をくれて、二萬兩の結納金を受取つた。その爲めに長原家は永久に一切の親類から絶縁された。金で賣られたもの娘と云ふのは、素々下女の腹に産れたもので、維新以來、世の中の移り變りにつれて、昔に引さかへ、散々貧しい生活をしなければならなくなつた。苦しまぎれに、どうせ正腹でもない。妻腹以下の者だからと強て望れるのを幸に、捨てる氣で一時を凌ぐ氣にもなつたのであらう。しかし以前榮えた親類で、その日を送り兼ねるやうな貧しさに落れたのは幾軒もある。現に山川の家から補助されて、やつと生活して居るやうなものも澤山ある。世が世なら——とさうした氣

位はへ保つて居れば、貧乏だからと云つて、さうか人から馬鹿にされる事も無い、旦那様奥様と立てられもする。自家は舊家だ、家柄だ、さうした事を誇るの

は、馬鹿々々しいと考へながらも、小枝子は山本の小父様や、篠原の

みづから様と呼ばれた人達



「乾度あんな連中が文句を並べて、格式を下した長原と親類交際をさせなくしたのに相違ない！」

子文木高道海北

長い／＼龍甲の弁をさした片はづしと云ふ、錦繪てよく見る大奥の老女のやうな頭髪に結つて、明治何十年と云ふ世の中になつた後で、能く着てみづからが／＼と澄しめる篠原の小母様など小枝子は好きではないけれど、美しい上品な、金時繪の手道具だの、刀だの、朝々のあてうづ

げもない生活にも追はれ勝ちてあるけれど、一年中親族うちさへ廻つて歩けば、立派な御隠居様で通つて行ける。中以上の暮をして居る家の何處へ行つても、旦那ややて立て、床の間を肴負つて座らせても呉れる。

に用ひる朱塗の手盥や、そんな風なものを見るのは嫌でも無い。小枝子は又、父や母の従弟に當つて、御典醫の家に産れた小父様達の、若い時分の美しくい華やかかつた話を聞くのが好きで、力彌齋に結つた頭髪の



根元を紫の打紐でキリ、と巻いて、紫紺縮緬の中振袖に小さき刀をさし込んで町を歩いた、その若衆姿を想像しては、夢見るものゝやうに恍惚考へ込んだ事もある。

「長原にも困つたもんぢや。」

斯う父と母との話を傍聞して、小枝子は小さな胸を悩ませた。

長原校長は自分の家と山川家との關係を知つた町の人達への面目から云つても、是非赴任と一緒に山川家へ親しく出入りして、せめて自分一人だけでも、親類の交際をして貰ひ度いと思つた。そして屢々山川家を訪ねては泣きつくやうに頼みもした。だが康之進は中々聞き入れない。校長先生に氣の毒だ、父様も餘りだ、初めの間は小枝子もさう思つたが、段々一年は一年と成人なるのにつれて、小枝子は沁々山川家の娘と生れた身の幸福を感じて來た。そして金の爲めに格式を下し、家を汚した長原校長の祖父が、如何にも卑しい人のやうに思はれて、校長から親しげな言葉を掛けられるのさへ、嫌なやうな心地がした。

か云つて、その年の勅題の裾模様は黒地に白く、いつきりと派手に染め出された鹽瀬の二枚小袖を品よく着こなした、可成の美人であつた。

康之進はこれに少からず心を動された様子であつた。夜分など小枝子はよく、炬燵にあたつてじつとその眞實を、大道具者でも持つてゐるやうな虫眼鏡にすかして、ためつすがめつ見入つて居る父を見かけたものである。だが何故だか和彦が嫌だと云ふので、縁談はそれに定まらなかつた。

公卿の姫君、紳商の愛嬢、皆それ／＼に話も進め、取り調べもしたが、和彦が是ならばと、わざ／＼眞實を持つて相談に歸省したのは、某専門學校の卒業生で、東京の女學校に英語の教師を勤めて居る女であつた。

「ねえ小枝さん、あなたは如何思ふ？」

小枝子は氣のせい、か、和彦の眼に熱をひびて居るやうにも思つた。××藩の家老で、父は今北陸の郡長をして居て、相當な資産も有る。錦仙の着物らしい上に紋羽二重の三つ紋の羽織と云ふ身装で、質素な中にも

だがそれも子供の時の考へて、女學校を卒へて、更に専門の學校に入るやうになつてからの小枝子は思想も變つた。一寸と其處いらを散歩したいと思つても、女中をつけれられたり、田圃の中の百姓達から、わざわざ捻鉢巻の手拭を脱つて、膝坊主のあたりまで手をさげて、一々懇に挨拶されたりするのが苦になつた。

「如何してあゝてせう？」

和彦も郷里へ行くのを面倒臭がつた。

永年アメリカに洋行して來た和彦は、門地門閥の高く正しい上に、兎も角縣でも相當な財産家として知られた山川家の嫡子だと云ふので、數へ切れぬ程澤山な嫁の候補者があつた。京都の公卿華族某家の姫君、時の紳商某氏の愛嬢、某博士の令嬢、その他地方からの申込は非常なもので、小枝子は正装した若い娘の眞實を幾枚と無く見せられた。

「これは播州の××家の末娘ぢや、姉は知事夫人になつてる、門閥も善い」

學習院の出て、某の宮へ行儀見習にあがつて居ると

何處か犯し難い氣品が備はつて見えた。

「まあ好い事、この方てせう英文雜誌などによく西洋の伽ばなしなどを翻譯してらつしやる方？」

「さうだ」

眼と眼と見合つた兄妹は莞爾微笑んだ。

「郷里が遠い！」

「遠いつたつて、今ぢや汽車で行くから何んでもありアしませんよ」

「いゝや、さうも行かん！」

康之進は色々考へた結果、どうしても地方的門閥家の中から撰んだ方が好い様に思ふと云ふのであつた。

「これは如何ぢや？」

高島田に明石らしい縞の薄物を着た姿の、しんなりと華奢で、而も健康らしい肉附の令嬢の眞實である。

「攝津の後藤の娘ぢや」

康之進は得意氣に一座を見廻した。

「學校は？」

「それがな、家庭教師をひかえてな、女學校へ出すと、



「隠れていかん云ふのぢや」

和彦の容子を気にしながら、康之進は頻りに辯解めいた口の利き方をする。

「私の希望は、代筆で手紙を書けるやうなのが好いのですから……」

「それぢや、これを見い、私もさう思ふて筆跡を所望したんぢやが」

康之進は床の間を振り返つて、手箱を探つた。

「後藤家は前、備前の鹿島の親類ぢやから、やはり自家とも縁家先ぢや、血統の取調も何も必要なし、舊家ぢや」

「人て吞込んだやうに吐きながら、一通の手紙を探し當てた。それは本人から鹿島の叔父へ送つたたゞの時侯見舞の手紙であつた。筆跡も高等女學校卒業生以上に見えられた。

「如何ぢやの？」

「上手ですね、併し假名使がねえ」

和彦は小枝子を振り向いた。

小枝子は幾度と無く訊きさうにして、その都度言葉がさまた。兄妹は黙つたまゝ並んで立つた。薄暗の迫つた庭には、咲き盛つた霧島の花が、目立つて赤かつた。

「後藤のを貰ふ事に定つたよ」

小枝子は案外何でもない和彦の調子に驚ろいた。

「オア何故？」

「思はず云つた小枝子の言葉の裏には、失望と、同情と、さうした感情が入り亂れて見えた。和彦はつと眼を外したが、やがて吐くやうに重々しく口を利いた。

「西洋と違つて、日本はまだ家族本位だからね、僕一人の満足よりも、家族一體の平和を考へなければ……」

「小枝子は呆れたやうに兄の横顔を見守つた。平素かあまことに温厚篤實な君子のやうな性格の兄から、斯うした言葉を聞かうとは思ひも掛けなかつた。捨鉢か

「さうねえ」

どちらつかずの返答はしたものゝ、小枝子は英語に堪能な人の方が、何かに気が合つて、兄の爲めにも、自分のためにもよさそうに思はれた。

「後藤はお前、舊家でもあるし、兵庫縣の多額納税者ぢやからな」

「併し金満家の娘を貰つたからつて、別に自分が金持になる譯でもありませんからね」

和彦は軽く笑つた。

「併し貧乏者の娘より好からうよ」

康之進も微笑んだ。だが小枝子は和彦の氣持を察しると、一切無關係らしい父の笑顔を見るに忍びなかつた。そして、ついと座を立つた。

その日の夕方、和彦は裏座敷の廻り縁の柱に脊をもたれて立つて居た。ふと通り合はせた小枝子は、すつくり氣の抜け切つたやうな容子の兄を見かけると、何故とも無し涙ぐまれた。

「何方にするお積りなの？」

とも考へて見た、だが氣に入らないからと云つて、自棄なんかを起す人ではないし、さうかと云つて何故あゝした氣のない顔附をして居るのだらう？ 不愉快なのか、さうでもないのか、小枝子は判断に苦しむやうな氣持がした。

「兄さんはあの方と交際して？」

ふと斯うした事を訊く氣になつた。

「あゝ、二三度××博士の宅で出逢つた、謠曲を聞かされたりしてね、女の癖に馬鹿にうまいんだよ」

和彦は幾らか元氣づいて來た、だが小枝子は、兄とその女の間に多少戀めいた感情があつたのではなからうかなどと、心の中で考へ込んだ。

結婚後の和彦は善良な夫として新妻を愛した。

「全く不思議なものだこと！ 本當に結婚すればどんな人でも同になるものかしら？」

戀愛、さうした事を重く考へ馴れた小枝子は、時として兄の性格を物足りなくも思つたが、折々は又運命の前に盲従し得る和彦を幸福な人だとも羨み、舊家



を誇り門閥を誇る、田舎の豪家の總領に産れついた不幸をあはれみもした。

「私なら決して！」

小枝子は家族的平和の爲めに、その身の幸福を犠牲にするのは嫌だと思つた。だが、さうかと云つて嫁に對して、別に如何かうと缺點を見出した譯でもない、大家に育つた嫁は、世間知らずの嫌ひはあるが、何彼にゆつたりした處があつて、氣品があつて、無邪氣で、快活な、地位あり、資産ある良人にかしづくに應じぬ人であつた。

「門閥さへよかつたら、本當に良縁なのだけれど……」

小枝子は嫁に似た、何處から何處までと様育ちの美蘭子の姿を思ひ浮べた。

「金持の息子へ嫁さへすりア申分の無い女さね、幾らでも自由に使つて、良人を樂しませる術も知つてるやうだ」

去年の夏二十日ばかり一緒に暮して、後から和彦は斯うも語した。

たゞと祖先が馬方であつたとしても、それが何だら

う、不正な富で無い限り、寧ろ尊敬しなければならぬ位なものである——それは康之進も承知はして居るが、當主の前の、つい先代が馬方で、それが本人の祖父に當る。斯う思ふと、長谷部家は餘りに世間の記憶に新しい。

「私ア、淺黄縞の襦袢着て、荒縄の帯をめた佐市を見るやうぢや、馬追歌が聞えるやうに思うがのう」

「そうですとも！」

和彦も同感らしく首肯した。

「いつそ東京で暮らせる條件つさにしたら」

小枝子は一人でこんな事も考へた。だが、直ぐそれは云ふべくして行はれない事なのに氣がついた。何故と云つて、折角買つた看板なら、誰しも店頭に掲げたいのが、世間一般の人情である。何百里かけ離れた旅の空に打ち捨て置く位なら、何も殊更ら後藤の家を撰んで結婚しなくても可いわけである。

「屹度山川は自家の親類だつて威張る積なのだらう」

小枝子は心から苦笑しないでは居られなかつた。そしてつくづく縁談の難かしさを思ひ當つた。(完)